# SWitch

夏岸希菜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＷｉｔｃｈ

【Ｎコード】
Ｎ０５６９Ｗ

【作者名】
夏岸希菜子

【あらすじ】
争い事は苦手なのにも関わらず、魔性の退治を依頼され、断りきれずに森へ入ることになった青年アズ。その森の中で包帯まみれの小さな少女グレイスに出会う。アズとグレイスの魔性退治（！？）の旅が始まる……。◇主人公たちがトラブルやら揉め事やらに巻き込まれつつ、行ったり来たりする話になる予定です。

◆基本的に不定期更新の予定です。

## 蜘蛛の巣 - 1

アズは困った。
腕や顔が傷だらけなのは決して争いごとが好きだからではない。村に入る少し手前で怪我をした猫を見つけ、手当てしようとして引っ掛かれたせいだ。左目を眼帯で覆っているのは歴戦の古傷を隠すためなどではない。確かに、人には見せたくないものだから隠しているが、傷などないのだ。
第一、アズは治癒系統の魔術しか使えないし、刃物も大の苦手だ。

一体どこからそういう話になったのだろう。
宿の一室。アズの前にはトトナ村の長がいて、事情を説明し続けていた。
「このままでは村の存続に関わるのです」
「はあ……」
村民たちの目には、アズが血気盛んな青年に見えたらしいのだ。
泊まろうとした宿には村長が直々にやって来て、魔性（ましょう）――人間以外の魔術を使う生物のことだ。一般的に、人間は魔性に対して良い印象を抱いていない――の退治を依頼してきたのである。
村長の話を聞くところに因ると、村から程近い森の中に魔性がいて、森に出掛けた村人が次々に失踪しているらしい。そこで、村で大枚を叩いて魔性退治の募集広告を出したのだが、退治のために現れた屈強な男たちも戻って来ないのだと言う。それが、約三ヶ月前の話。つい一昨日には、村の若者で隊を組んで討伐に出掛けたが、やはり帰って来ていない。
アズは思った。これをまともに請け負ったら死ぬ。屈強な男でも、複数でも駄目だったのだ。力自慢ですらないアズが一人行ったところで、退治は不可能だ。
しかし、トトナの村長は、これが最後の望みとでも言いた気だっ

た。断わっても断わっても食い下がり泣き付くのだ。良い年をした男があまりにも本気で泣くので、アズは若干引いていた。しかし、ここまでされては無碍(むげ)にできないではないか。だが、村長のあの話を聞いて退治をしようと思うのはただの無謀というものだ。

という訳で、アズは困っていた。

退治はできない。だが、説得くらいならできるかもしれない。意外と知られていないことだが、魔性が人間に危害を加える時には、大抵人間側に理由がある。単に肉食なだけのこともあるが、通常、何の理由もなく人を襲うことはないのだ。

アズが最初に出会った魔性もそうだった。彼女は怒っていた。そして、悲しんでいた。息子が人間の放った矢で傷付き、生死の境をさまよっていたのだ。彼女は暴れ、アズの暮らしていた村を襲った。当時、幼かった彼は彼女の出した条件を飲むことしかできなかった。恐ろしかった。だが、条件さえ飲めば村を救うことができるのだと、自分に言い聞かせた。すると彼女は、条件を飲んだ彼を傷付けたりはしなかった。それどころか、村に戻れなくなったアズに、彼女は「あなたは私の子よ」と言いしばらくの間面倒を見てくれたのだった。

そんな過去のおかげで、アズは魔性に対してあまり悪い印象を持っていなかった。魔性を一概に悪と決めつけている人間のほうがむしろ嫌いだった。そんなことを言えば異端視されるのがオチだから黙っておくが。

「ですから村としましても魔性を退治して下さったあかつきには、報酬は差し上げますし――」

トトナ村長は涙ぐみ、土下座した。

「この通りです！」

「さっきから言ってますけど退治なんてできません。顔を上げてください」

「そこをなんとか――ッ」

こんな会話も本日十回目になる。毎度の如く平伏されると、アズ

は何だか悪いことでもしているような気がしてくるのだった。
それでつい、言ってしまった。
「わかりました」
口が滑った。
まずい、と思ったときにはもう遅かった。
眼前に、涙に濡れた中年男の顔が迫る。本人には失礼だが、はっきり言って目の毒だ。
「あああありがとうございます恩に着ます！」
「ですが――」
退治ではなく説得で良いか、尋ねようとして言葉を切られた。
「では早速準備をば！」
トトナの村長は足早に去って行く。何を準備する気なのか。防具はともかく、剣は論外だ。アズは飽くまで説得に行くのだから。
面倒なことになった。トトナ村長の暴走からすっかり置いてけぼりのアズは嘆息した。

◆

村長から教えられた道に沿って、トトナ村から歩くこと十五分。
徒歩十五分とはいえ森の中だ。切り倒された木が数本あり、切り株が残っている。そこに、彼女は座っていた。
小さな女の子だ。年は十二、三歳だろうか。灰色の、長い髪は二つにくくってある。服装はぼろぼろで薄汚れていて、なにより目に付いたのはその肌を覆い尽す程に巻かれた包帯だった。指先から足元までは飽き足らず、顔にまで包帯が巻いてある。あまりにも奇妙な格好だった。
……本当に怪我だろうか。
少女は近付いてきたアズに気付き、顔を上げた。包帯で隠された肌の隙間から、青く丸い目がアズを見つめていた。
「あなた、だれ？」
アズが名乗ると、少女は自分の名はグレイスだと応えた。

「グレイスと呼んでね」
どうしてかはわからないが、彼女はどこか哀しそうに見えた。
「グレイス――どうしてこんな所に？　この周辺に魔性がいるらしいって聞いたけど」
アズは怪訝に思い、聞いた。
「あたしね、あそこにある小屋に住んでるの」
すると彼女は体を捻って背後の森を指差す。目を凝らせば、確かに木で出来た小さな建物があるようだった。
「もうしばらく前なんだけど、魔性の怒りをおさめるためにって、あたしが供物（くもつ）になったの。それからずーっとあそこで暮らしてるのよ」
そんな話は聞かなかった。あの村長はわざわざこのことを隠していたのだろうか。どうせすぐにバレるというのに。
グレイスがぴょんと跳ねて立ち上がる。彼女の髪は、起立してなお引きずりそうな程に長かった。
「あたし、久しぶりのお客様で嬉しいの。ねえアズ、少しお茶してってちょうだい！　魔性のことも、あたし詳しく教えられるわ」
グレイスがアズの腕に体重を掛けて引っ張る。ずっと一人きりで寂しかったのかもしれない。彼女は少しはしゃいでいた。
まあ、少し話し相手をするくらいなら良いだろう。
アズは少女についていくことにした。

## 蜘蛛の巣 - 2

小屋は朽ちかけていた。
さすがに屋根に穴は空いていないだろうが、蔓(つる)性の植物が絡まり傾いている。小屋の脇にある井戸も、石で出来ているがヒビが入っていた。そして、何かが腐っているらしく、どこからともなくすえた臭いがするのだ。
嫌な臭いだ、とアズは思った。
一方、グレイスは慣れてしまっているのか、元気そうにしている。
「古くて雨もりもひどいけど、住めば都なのよ。ゆっくりしてってね」
グレイスがアズを招き入れる。
小屋の中は、予想を裏切らない薄汚さだったが、それでも少女が住むだけあってきちんと整理はされていた。
しかし、臭いは中に入るとさらに強く鼻を刺激した。よく平気でいられるものだ。
「さ、座って座って！　お茶って言ってもお水しか出せないんだけど」
言いながら欠けたグラスを差し出すグレイス。アズが席に着くと彼女も向かいに腰を下ろした。
しばらく辺りを見回していたアズは、グレイスの背後に出入口とはまた別のドアを見つけた。この小屋は一部屋だとばかり思っていたが、別に寝室があるようだ。
話を聞かせて欲しいとグレイスがねだったので、アズはこれまで見てきたものの話をした。それほど珍しい話ではなかったが、彼女は目を輝かせて聞いていた。
話が尽きかけた頃、ふとアズは不思議に思っていたことをひとつ思い出した。
「そういえば、さっきからずっと気になってたんだけど、その包帯

は、怪我か？」
「違うの。これは――あのねっ、あたし本当はね……っ」
不意に、グレイスが泣きそうな震えた声を出す。
「どうした？」
「ううん、やっぱりなんでもない」
グレイスは萎(しお)れたように俯(うつむ)いてしまった。何かまずいことでもしただろうか。
グレイスに、触れられたくないことを尋ねてしまったのかもしれない。
いくら幼いとはいえ一応女の子の部屋な訳だから、じろじろと見てはいけないのかもしれない。
「アズ、ごめんなさい」
いつの間にか、グレイスは青く澄んだ瞳を潤ませていた。アズは何が起こったのかわからず困惑した。
なぜ謝るのか。訳が分からない。
とりあえず、彼女の傍に寄って頭を撫(な)でてやる。彼女の涙は、流れることなく顔を覆う包帯に吸い込まれていく。
「大丈夫だから、落ち着いて」
包帯の巻かれた小さな手がアズの衣服を強く引っ張った。
「お願い、助けて。あたしを一人にしないで。どこにも行かないで。ずっとここにいて」
彼女が泣きながら愛の告白じみた台詞を述べたのを、アズは聞いた。
今日一日で泣き落としが二人目だなあ、と頭を掠(かす)めたが、問題はそんな下らないことではない。
アズはいつか、どこかに定住したいと考えている。どこかはまだ良く分からない。しかし、その場所はここではない。今でもない。完全に二人きりのおんぼろ小屋ではないのだ。
「悪いけど、それはできないよ」
グレイスの頭を優しくぽんぽん、と叩きながら、アズは諭(さと)すよう

に彼女に言い聞かせた。
「ずっとは無理だ」
ふるふる、と彼女は震えていた。ただ寂しさで泣いているのだと思っていた。

◆

変化は、すぐにやって来た。
「あああああああ――ッ」
「え……」
グレイスが奇声を上げた。髪を乱し、暴れる。彼女の瞳は紅く明滅していた。乱した髪が強く波打ち、アズは一歩、後退(あとずさ)る。
「だめよ、そんなの許さない」
強い口調で彼女は言った。
「どうして……」
グレイスが魔性だったのか。
だが、彼女は確かに助けてと言った。彼女は助けを求めていたのだ。
もしかすると、グレイスは供物として――この魔性に取り込まれてしまったのかもしれなかった。
魔性と人間は、稀なことだが、ある条件を満たすとき、融合してしまうことがある。体だけではない。心まで溶け合うのだ。完全にひとつになる。だが、ふとしたきっかけでバランスを崩したとき、どちらかが優位に立ってしまう。
現在の彼女は、魔性に意識を奪われかけているように思えた。
いざというとき逃げられるよう、アズはさらに出口へと下がろうとした。
「逃がさないわよ」
グレイスが髪を逆立てる。するとまるで蛇のようにうねり、四方から蜘蛛(くも)の糸の如く伸びた灰色の髪がアズの四肢を絡め捕る。
身動きが取れなかった。動こうとすればするほど拘束はきつくな

っていく。締め殺される前に、アズは逃げるのを諦めた。
この魔性が、肉食でないことを祈る。
「グレイスの――望みは何？」

## 蜘蛛の巣 - 3

「取引しないか。俺は、人に危害を加えるのを止めて欲しいんだけなんだ。止めてくれるなら、代わりにひとつ、望みを聞く」
交渉の開始だった。
苛立ちを隠さず魔性グレイスの口許が歪む。
「さっきから言ってるじゃない。ずっと、死ぬまで、永遠に、アタシから離れずここにいなさいって」
嫌な条件だ。できればお断りしたい。
「そう言えば、他の人たちは？」
断ったらどうなるのか。それが知りたかった。
「ここに来た人たちはアタシの正体を知って逃げ出そうとしたのよ。ひどいでしょう？　だから、逃げ出せないように閉じ込めたの。最近、アタシを殺そうとする人も多いけど、そういうのもきつーく縛って閉じ込めといたわ。もしアズがおとなしくしてくれるなら、自由にしてあげてもいいのよ、この小屋から離れなければね」
つまり、消えた村人たちは、もう一つの部屋に押し込められているということか。少なくとも、しばらくは生かされるようだ。
しかし、どうしてそこまでこのおんぼろ小屋にこだわるのか。グレイスのほうがアズについてくれれば、トトナ村の問題もすぐに解決できるだろうに。
そんなことを考えていると、彼女はアズの左目を覆うものの存在を気に止めていた。
「ねえアズ、その眼帯、ないと困るわよね。何を隠しているのかしら。人に晒したくないから隠しているのでしょう？」
彼女はアズの自由を奪えることに喜びを感じているようだった。形勢は間違いなく、グレイスが優位だ。アズと取引などしなくても、彼女は思い通りに振る舞えるのだ。
危機の真っ只中だが、アズはひとつの可能性に思い当たった。—

―もしかするとグレイスがこの場所にこだわるのは、ただ怖がっているだけなのではないか、と。
「醜い傷？　それとも痣かしら？」
アズは問いに答えなかった。
奪いたければ奪えば良い。アズは別に困らない。衆目に晒したいものではないが、グレイス一人に見られるだけならまったく問題なかった。むしろ、事実を知ってもらったほうが良いように思う。
するすると灰色の髪が腕を這上がり、アズの頬を撫でる。そして、器用に眼帯を外し持ち去っていく。
左目には傷も痣もない。右目と同じく茶色い瞳があるだけだ。
「アズ、あなた――」
グレイスの丸く見開かれた瞳から赤が引いていく。拘束が、弛む。
「アズも同じだったのね」
彼女が見たアズの姿は、人間のそれではなかった。髪と同じ、黒っぽい茶色の獣に似た耳が頭部から生えている。人間にしても魔性にしても中途半端な姿だ。
初めはアズも怖かった。
誰にも受け入れてもらえないのではないか、この姿がバレたら殺されてしまうのだ、と。
眼帯は、この姿を隠すための封じだった。身体的バランスを故意に崩し、姿を人間優位に変えるための枷だった。おそらく、グレイスのあの包帯もそうなのだろう。
「似てるだけだ、同じじゃない」
きっと、幼い頃のアズとグレイスは魔性に捧げられた子供として、似た境遇にあったに違いなかった。肉体や精神に魔性が混ざり込み、それを受け入れなければならなかった。だが、アズはこんな所で暮らすのは御免だし、人を襲う趣味もない。
グレイスはただ、寂しかったのだろう。アズには〈母〉がいたし、変わり果てた身を引き取ってくれる兄もいた。でも彼女は一人きりだ。

だから、敢えて言う。
「おいで、グレイス。人と暮らしたいならこんな所にいちゃ駄目だ」
この子をひとりぼっちにしてはいけない。誰もいないのならば、自分が保護者になろう。
グレイスはふらふらと、アズの許へと歩き出す。
「……アズ、あたし、大丈夫かな。怖いの、ずっと怖かったの」
顔を覆って、グレイスは再び泣き出した。
「人のいる所に出ていって、魔性を暴走させてしまったら、って。そう思うと、ここにしかいられなかったの」
「……」
そういえば、アズとグレイスの間にさらに大きな相違点があった。アズは治癒魔術しか使えないから気にしたこともほとんどなかったが、グレイスの魔力が暴走したらどうやって止めるのだろう――まあ良い。乗り掛かった船だ。なんとかなる、……だろうか。
ほとんど解けてしまった灰色の蜘蛛の糸を振り払って、アズは手を伸ばした。
「もう心配しなくていいんだ。暴走、しかけたら止めてやるから」
その手の先にいたのは人を喰らう魔性ではなく、一人の寂しがりの小さな少女だった。

◆

そこに一歩足を踏み入れたアズは、きつい腐敗臭に顔を顰(しか)めた。
グレイスの小屋の狭い別室には、たくさんの人間が詰め込まれていた。
村の青年と覚しき八人組、気性の荒そうな男が五人、何も知らずに迷い込んだらしい少女が二人。そして残りの十人は遺体だった。
グレイスがいると問題があったので、彼女には小屋の裏で待ってもらっている。一人にすることに多少の不安はあったが、ここにいる面々に助けに来たアズまで敵視されては叶わない。
アズは生きている者の束縛を解いていった。

皆が解放を喜び合うなか、筋骨隆隆とした男が、お前のような若造に云々、と何かを言っていたが聞かなかったことにする。
さて、死者の弔いは後から村で行ってもらうとして――その遺体の中には、白骨化どころか、脆(もろ)く崩れたものまであった。グレイスはいったい何歳なのだろうか――今はただ、生者たちを村まで帰すことが先決だ。
グレイスをひとり置いていくことに一抹の不安を感じていると、何かを察したのか、トトナ村の青年たちが率先して帰ろうと提案してくれた。
アズは彼らの厚意を受けて先に生存者たちを見送り、グレイスを迎えに行った。

◆

何がいけなかったのだろう。
「アズ、みてみて。人だわ、人がいっぱいいるわ」
窓枠に手を掛けて、グレイスははしゃいでいた。アズはいたたまれなかった。
「懐いたから連れてきたとはどういうことだ！」
縮こまるアズの正面では、トトナの長が怒り狂っていた。
グレイスがトトナ出身だと言うので、親戚や顔見知りがいるはずだった。
しかし、村長が生まれてから今まで、トトナ村は魔性に犠(いけにえ)を捧げたことがないらしく、無論グレイスを知る者もなかった。彼女を連れて尋ね回っていたところを今回の生存者に見つけられたらしく、村長が駆けつけて来て宿に連れ戻されたのである。
戻ってきた宿の一室。アズは村長からお叱りを受けていた。
「こいつは魔性なんだぞ！　お前には、常識というものがないのか！」
この村長は、さっき泣いていたのと同じ人物だろうか。性格の違う双子ではないのか。疑いたくなる。

村の危機を救ったはずなのに、魔性に関わりがあると分かると急に冷たくなる。そういうものなのだ。今、眼帯を外したら、この説教は攻撃に変わるだろう。

「いいか、その魔性を連れてさっさと村を出ていけ！」

ばん、とでかい音を立て村長は扉の外に消えた。

急激に静かになる室内。

ふと、背後からグレイスの声がした。

「大丈夫よ、アズにはあたしがいるわ」

彼女は眉をハの字にして微笑んでいた。今に泣くのではないだろうか。似ているはずもないのに、鏡を見ているような錯覚に捕われそうになる。

「……そうだなあ」

アズは気が付いた――寂しかったのは、実は自分自身だったのかもしれない、と。

## 魔性憑き - 1

アズは馬車に揺られていた。初めての馬車にはしゃぎ疲れたらしいグレイスが隣で眠っている。

トトナ村で積み荷を降ろした馬車を捕まえて、グレイスの噂が御者の耳に入る前に忙しく出てきたのだ。

御者の男には悪いが、そうでなければ夜通し歩き通すはめになっていただろう。少し嘘も吐いてしまったし、謝罪の代わりに謝礼を弾もう。

「いやぁ、あなたがたも大変ですねえ。トトナも魔性が出るって言いますし」

ちなみに、吐いた嘘とは「グレイスの母親が魔性の出る村に嫌気が差し、病気の娘を置いて出ていってしまったのでそれを追って探しに行く」というものだ。

馬車が小都市オニテュに戻るらしいと聞いて便乗させてもらったのだ。

オニテュはセロム王国のど真ん中にある都市だが、湖に面しており、首都のザンヴァまで川を下って一直線の位置にある。船による国内の物流の中継地として栄えているのである。

「しかしオニテュも安全とは言い難いですよ。最近、魔性が出ているのですよ」

「え、そうだったんですか」

初耳だった。トトナ村に寄る三日前まで、アズはオニテュ市にいたのだが。

「ええ、人に憑く魔性なのです。祓うこともできず人目に付かないよう隠してやるしかなくて」

人に憑く魔性。それは、自分たちと同じ状態のことではないだろうか。隠されているのなら、数日滞在しただけのアズが知る由もな

かった。それは当然だ。だが、この御者はそれを知っている――つまり、御者にとって身近な人物だということか。
「その人、紹介してもらえませんか。……これでも俺は治癒魔術師です。診たら何か解るかもしれない」
治癒魔術云々は嘘ではないが今回の件からはあまり関係がない。それでも理由なしに会わせてもらう訳にもいかず、はったりじみたやり方でアズは名乗りを上げた。
御者の男はいぶかしげに振り返る。アズの見た目からして、信じていないかもしれない。
しばしの沈黙の後、諦めたように男は呟いた。
「息子なのです」

◆

目的地に着いたのは、住民たちが寝静まる頃だった。実際、着いたのは夕方暮れ時だったが、トトナからの積み荷を降ろすのを手伝っているうちに、こんな時間になっていた。
「今日はどうも、お疲れ様でした。もう遅い時間ですし、明日ここに迎えに来ますね」
御者の男ことフランクは宿の前まで馬車を付けて二人を降ろし、去っていった。
彼の紹介してくれた宿は旅商人がよく使う宿で、空き部屋さえあればどんな時間でも快く泊めてくれるという話だった。
中に入ると、ロウソクのぼんやりした灯りの下で年老いた男が椅子に腰掛けているのが目に入る。アズとグレイスの形を見て、彼は不可解そうな顔をした。引っ掻き傷だらけの眼帯の男と、包帯に覆われた幼い少女の組み合わせだ。さぞ奇妙奇天烈であろう。
泊めて欲しいと申し出ると、老爺はますます眉間にシワを寄せ、二人を遠慮なく眺め回した。
「一部屋しか空いてないが、それでいいかね」
グレイスが目の届かない場所にいるのは不安だが、同室というの

もどうだろう。アズはグレイスに目をやる。
「アズと一緒の部屋！」
彼女は楽しそうに跳びはねていた。ぎろり、と老爺に睨まれる。寝ている人たちの迷惑にならなければいいが。
……グレイスが同室でいいなら、それでいいか。
アズは宿泊を決めることにした。

案内された二階の一室に、わずかな荷物を抱えながら入る。グレイスに至ってはまったく持ち物がなかったから、明日するべきことが終わり次第、買い揃えなくてはならないだろう。
「すごーい、ふっわふわー！」
グレイスは早速駆け出して、部屋にひとつしかない寝台の上に飛び乗り、弾ませて遊んでいた。馬車で昼寝をしたせいか、グレイスは異常に元気だ。夜中だということも忘れているのではないだろうか。
「もう遅いんだから、遊んでないで早く寝ろよ」
アズがたしなめると、不満そうにグレイスはむくれる。
「変な気を起こしたら、ただじゃおかないんだからねっ」
「はいはい、おやすみ」
変な気など、誰が起こすものか。
ずっと森の中にいたくせに、どこでそんなこと覚えるのだろう。呆れつつ、疑問に思う。
アズはグレイスがおとなしく寝台に入ったのを確認して、床に毛布を敷き詰め横になった。
寝心地が良いとはお世辞にも言えなかったが、疲れ切っていたアズは、瞬く間に眠りに就いた。

◆

まだ夜も明け切らぬ頃、グレイスは目を覚ました。二度寝をしようかと思ったが、昨日眠りすぎたせいかすっかり目は冴えざえとし

ている。
仕方ないのでむくりと起き上がり、伸びをする。
「……ここ、どこだっけ？」
ふと、思う。いつもの小屋ではない。小綺麗な部屋だ。
辺りを見回して、暗がりの中に床で丸まる青年の姿を発見する。
そして、安堵。
「あ、そか。アズについてきたんだった」
たしか、ここはオニテュとかいう都市の宿だったはずだ。
グレイスは寝台から降りて彼の顔を覗き込む。熟睡中だ。寝るときは眼帯を外してしまうらしく、無防備に正体を晒している。
「アズ、朝よー？」
つんつん、と頬に指を刺してみる。返事がない。疲れが溜っているようだ。起きてくれない。
朝というには少し早いが、グレイスは暇だった。もう一度挑戦。
「アーズー？」
今度は耳を摘んでみる。アズは小さな唸り声を上げて寝返りを打つだけだった。
つついても引っ張ってもろくな反応がない。つまらない。
それで、グレイスは、ちょっとした悪戯（いたずら）を閃いた。
「眼帯、隠しちゃえ」
満足気に笑い、グレイスは枕元のそれを掴み取った。

## 魔性憑き - 2

「うーん、いい天気」
日の出と共に、グレイスは朝の散歩に繰り出した。散歩は、森にいたときからの日課だった。ちなみに、アズはまったく目を覚まさないので置いてきた。今はグレイスひとりだ。
アズが起きる前には帰ろう――と心に誓った、つもりだった。しかし、そんなものは三歩で忘れた。
「はっ。なにあれすごーい！　あんな高い塔初めて見たっ」
昨日もあったはずだが、暗くて見えなかったのだろう。緑の屋根の尖塔が、空に突き出していた。何の建物だろうか。
きょろきょろ。他に珍しい物を求めてあちこちに視線を向ける。田舎者丸出しである。
「うわあ、こんな細い道まで石畳だー」
路地に入り込んで、さらに突き進む。抜けると、ちょっとした住宅地のようだ。
ふらふら。誰かの家から香ばしい匂いが漂う。朝御飯の香りもどことなく上品な気がする。
「はあ、やっぱ都会は違うよねえ……」
空気を吸い込んで一言。
うろうろ。焦茶の小型犬が小路から早足で歩いてくるのを見て、グレイスは叫んだ。
「犬っ！　アズと同じ毛色！　かわいいっ」
グレイスに追われ、小さな犬は怯えて逃げる。文字通り、尻尾を巻いて。三つ先のブロックでその姿を見失い、グレイスは追跡を諦めた。
てくてく。オニテュの市街はどこまでもどこまでも続いているように感じられた。
「ん？」

何時間歩いたっけ、とグレイスは首を傾げた。気付けばもう、日は高く昇っている。
そして、今朝立てたばかりの誓いをようやく思い出す。
アズが心配しているかもしれない。
慌てて元来た道を振り返ると、突き当たりに知った顔を見つけた。
「フランクさん？」
向こうも彼女に気付いたらしく、こちらを向いて足を止めた。

◆

これから迎えに行くところだったのだ、とフランクは説明した。近場なので、今日は歩きだった。すると奇遇にも、昨日の少女に出会ったのだ。
「ところで、お二人はどういったご関係なのです？」
兄妹というには全然似ていないし、母親探しをする気も感じられないし、アズは治癒専門だがグレイスが病気という割りには元気すぎるし、いい加減疑問だったのだ。
「あたし、アズの妻なの！」
自慢気に少女グレイスは言い切った。
「あーなるほど。やっぱりそうでしたか」
勝手に納得するフランク。ちなみに彼の予想では駆け落ちのカップルだった。彼女はまだ子供のようだし、親に反対されて逃げてきたのだろう、と。
「馴れ初めは」
フランクは駆け落ちに遭遇するのは初めてなので、個人的に興味が湧く。
「なれそめ？」
言葉の意味が解らないらしいグレイスが首を傾げた。
「出会いのことです」
「出会いは、ねえ……森の中だったわ。それで、あたしはアズをお家にお誘いしたの。でね、あたしね……えーと、アズを縛って襲っ

ちゃったのね」
反応に困る急展開。いくらなんでも早すぎやしないか。しかも、この少女から？　あの男は幼女趣味（ロリコン）の上に、被虐趣味（マゾヒスト）者なのか？
「――……意外なご趣味ですね」
フランクは呟いた。聞こえていなかったようで、グレイスはそのまま話し続ける。
「で、アズがね、一緒に行こうって言ってくれて、あたしはついていくことにしたの」
そこで、少女は恥ずかし気に笑う。
最近の若者は理解できない、とフランクは思った。

◆

アズが目覚めると、もうだいぶ明るかった。
カーテンを開いて外を見れば、朝というよりは昼前という雰囲気だ。
「……寝すぎた」
アズは頭を抱える。いくらなんでも、もうそろそろ宿を出るべき時間だろう。早いところ支度を済ませ、荷物をまとめなくては。
――と考えて間もなく、気付いたことが二つ。
眼帯がない。
グレイスがいない。
これは、いったいどういうことだろう。アズは最悪の事態を想像して青くなる。
グレイスは本当に、人の中で暮らしたいと思ってアズについてきたのだろうか。アズを足止めし、逃げ出す理由があるのかもしれない。
例えば、森で人間を待ち構えるのに飽きて、街に出て自ら人間を捕まえることに魅力を感じたのだとしたら。あの今までの子供っぽいそぶりも演技だったとしたら。
それとも、グレイスの魔性が暴走してしまったのか。止めてやる

と言ったにもかかわらず、何もしてやれなかったのではないか。
魔性のことが知れたら、グレイスがどんな目に遭うか分からない。いくら強い力を持つ魔性だとしても、殺されているかもしれないのだ。――アズが連れてきて、目を離してしまったせいで。何かがあったらアズの責任だ。

床の上、テーブルの上、寝台の隙間。
眼帯がないか、探したが見つからない。とりあえず、それがなければ外に出られない。もどかしかった。
もう、代用品でも良いだろうか。アズは引き千切るべきか、と煤けたカーテンを睨んだ。
ふいに、声が聞こえた気がした。
「ただいまぁ。アズ、起きてるー？」
幻聴ではない。グレイスだ。生きていた！
アズは探し物を放り出して、扉を勢いよく開いた。
「グレイス！　心配したんだぞ、いったいどこに……」
世話が焼ける少女の小さな体をぎゅうと抱き締め、ため息を溢す。無事生きていてくれるならそれで良かった。
「あつあつですねぇ」
……あつあつ、とは何だ？
アズは顔を上げ、楽しそうに自分たちを見守るもう一人の存在に気付いた。
そして沈黙。
今、アズは寝起きの素顔を晒している。眼帯はない。人らしからぬ魔性の身体的特徴が現れている。中でも、ぴんと立った獣のような三角の耳は目立ってしまう。
目撃者がフランク一人だけだったのは、不幸中の幸いだろう。
慌てふためいて頭に手をやり、アズは苦笑した。
もう遅すぎる。
出直したい、と本気で思った瞬間だった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0569w/

SWitch

2011年10月8日03時10分発行